

本水昌二教授山陽新聞賞（学術功労）受賞

日本分析化学会元副会長・本会前委員長の本水昌二先生が、山陽新聞賞を受賞されました。山陽新聞社の受賞記事を掲載し（山陽新聞社提供）、先生のご功績を称えます。

JAFIA 委員長 酒井忠雄

山 陽 新 聞

2009年(平成21年)1月3日 土曜日

学術功労



岡山大大学院教授

もとみず
本水
しょうじ
昌二氏(64)

岡山市福泊

「『分析化学』という難しいが、要はごく微量の物質を探すこと」。さりとて話すその単位はppm(百万分の一)よりさらに微量なppt(一兆分の一)の世界。東京ドームを水でいっぱいにして角砂糖(一ダ)を溶かしたような濃度だ。

超微量(マイクロ・ナノ)分析化学の第一人者。高梁市成羽町出身で、一九六八年岡山大大学院を修了後、同大で研究者の道へ。大気、水環境を長く専門とし、人体に有害な物質の測定技術や装置開発に力を注いできた。

「研究が進むほど、対象はどんどん微量になる。分析は測定までが大変で、捕捉剤の合成や濃縮技術を考えるのに

分析化学の第一人者

手間と時間がかかるんです」。カニ、エビの甲羅から取れるキチン・キトサンをベースとしたユニークな捕捉剤の合成を考案。水中の有害金属類の除去や濃縮を可能にした。

「理論の裏付けは大切だが、それをいかに実用化するか。研究は世の中に役立つこそ意義がある」。研究者の自負がのぞく。

「分析化学は環境、産業、食の安全など幅広い分野で応用可能」。今春、定年退官を迎えるが、同大インキユベータで研究を続ける。「これまで企業任せだった装置の開発にも挑戦したい」(伊丹友香)